

教材研究と教材の扱い方(12)

「春はあけぼの」 その二

一

「教材研究と教材の扱い方(11)『春はあけぼの』(『文
教国文学』第四十一号)の教材研究に続いて、本稿では
『春はあけぼの』の教材の扱い方について考えてみたい。
念のため、『枕草子』第一段の本文を載せておきたい。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはす
こし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。螢の多く
飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかに
うち光りて行くも、をかし。雨など降るもをかし。

秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりた
るに、鳥の寝どころへ行くとして三つ四つ、二つ三つな
ど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などのつ
らねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日の

菅原敬三

入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあ
らず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあら
ず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火
など急ぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。
昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白
き灰がちになりて、わろし。

(日本古典文学大系『枕草子』池田亀鑑、岸上慎二、岩波書店)

前稿において私は、「春はあけぼの」を教材研究した上
で、学習の意義と考察と学習課題を次のように明らかにした。

1 この教材は、学習者に四季の特色を改めて自覚させ、
自然に対するものの見方の拡充・深化に有効である。
また辻邦生の文章を参考にしながら、「日本人として
四季に恵まれたことに感謝」したり、「清少納言が歡
喜を持って四季を迎えている」感覚を学習することが

できる。

2 四季の特徴や良さをとらえるのに、「時」という視点を導入した作者の感覚の独自性や鋭さが学べる。

3 「うまい」と思わずつぶやくような表現の的確さや巧みさが学べる。

4 文章の構成に対する細かい配慮が学べる。等々である。

これらのことを踏まえて、どのように授業展開をするのがよいか、板書を含めて考察したい。

二

学習者と教材を結び付けるため、学習者に四季の良さや四季の気に入った所を最初の一文に書かせ、その理由を第二文以下に書かせる。こういう学習方法に対する検討はここでは置くことにする。教材の価値を生かした授業方法の考察にとどめておきたい。

*

教材によって、その扱い方は様々に異なるであろうが、この教材の場合、最初に全文を読むか、「春」の部だけを読むかによって展開は異なってくる。しかし、授業展開は異なっても、到達する目標は同じように設定できる。私は次のように学習目標を設定したい。

1 四季の良さを「時」に注目してとらえる作者の感覚の鋭さや独自性をとらえさせる。

2 教材の学習を通して、学習者自身の四季に対するものの見方を確認させ、四季の良さを時間をかけてとらえる目を育成させる。

3 情景をとらえる作者の表現の的確さ、巧みさをとらえさせる。

4 最初の一文と第二文以下が、結論と説明の関係になっている点に注目させ、効果的な文章構成をとらえさせる。

授業展開を模擬授業風に展開してみたい。(Tは教師、Pは学習者を、*は展開上のポイントを示す。また、板書も合わせて示したい)

〔第1時〕

T 今日、枕草子の第一段「春はあけぼの」を勉強しますが、作者の四季に対するものの見方と表現の特質や効果について考えます。まずは春の部だけを読んでもらいます。

*学習目標と扱う教材の範囲は、授業の初めか早い段階で言わなければならない。そうしなければ、授業で何をやって、また、どこまで進んでもいいということになり、場

当たりの授業に陥ってしまおう。

T 今、春の部を読んでもらいましたが、ここで考えてほしいのです。「春はあけぼの」という表現はちょっと変なと言えいいのでしょうか。ちょっと変わった表現と言っていると思います。どういふ点が変わっていると言えますか。

P
T 難しいようですね。ここでちょっと説明を加えますと、「春は」の「は」は、係助詞という助詞で、「ある事柄を他と区別して、あるいは特にとりたてて言う」場合に用います。「春は」は主部を表していますが、「は」は主語を表しているのではないんですね。「春」というものを取りたてて述べようとする訳です。少しややこしいのですが、ここはしっかり区別してください。

では、考え易くするために、「山は富士山、穂高」、「川は利根川、筑後川」というのと比べるとどうですか。
P わかった。「山」と「富士山、穂高」はすぐ結びつくけど、「春」と「あけぼの」とはすぐには結びつかないのじゃないですか。

T そうですね。そこが変わっているといえますね。そこまでのことを板書しておきましょう。

〔板書〕

・ 特異な表現——「春は」と「あけぼの」とはすぐには結びつかない。

・ 主題の提示

春 は あけぼの。

T ここでもう一つ考えて欲しいのです。「春はあけぼの」という表現は特異な表現であるというのが分かりましたが、結びつきにくいものを結び付けたという点だけでの特異さだけではないんですね。もう一つ別な意味で特異さがあるのです。自然をとらえる目の特異さと言ってもいいと思いますが、それは何でしょう。
P 四季をとらえるのに、「あけぼの」という「時」に注目した点です。

T そうです。本当によく分かりましたね。大事な点です。板書して置きましょう。

〔板書〕

・ 四季を「時」に注目して、その良さをとらえる。

・ 特異な表現——「あけぼの」＝「春は」の主部にすぐには結びつかない述部

・ 主題の提示

春 は あけぼの。

T だいぶ面白くなってきました。「春はあけぼの」を初めて目にした読者は、「えっ」と思ったことでしょう。「何で」と思ったかもしれません。

ここでも考えなければならぬ問題が出てきました。作者はなぜ読んですぐに分からない表現をしたのでしょうか。どのような場合でもそうですが、人間がものごとを表現する場合、表現者は必ずその効果を考えるものです。「春はあけぼの」と表現することによって、作者はどのような効果をねらったと言えるでしょうか。春の部全体を読んで考えてみてください。

P

T 難しいですか。では、こうしましょう。第一文と第二文とは、どういう関係になっていますか。

P 第一文が結論で、第二文がその説明です。

T そうですね。第一文が結論で、第二文がその説明と言えますね。また、こうとも言えます。第二文は第一文の理由である。

では、第一文で「春はあけぼの」と表現した効果として、どのようなことが言えますか。

P 第二文を読まないと、第一文の意味内容が分からないように書かれています。

T そうですね。実によく考えられた表現です。よく計

算された表現とも言えますね。ここまでのことを板書しておきましょう。

〔板書〕

・表現効果

目を引くような特異な表現

第二文を読まないと、第一文の意味内容が分からない。

・特異な表現

四季を「時」に注目して、その良さをとらえる。

「春は」と「あけぼの」とはすぐには結びつかない。

・主題の提示

春 は あけぼの。

（結論）

←

（説明・理由）

やうやう白くなりゆく山ぎはすこし明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

T では、春の部の最後に、第二文について考えましょう。この文は「春」の「あけぼの」の何を書いたものと言えますか。

P 「あけぼの」のすばらしさです。

T そうですね。「あけぼの」のすばらしさと言えますが、もう少し丁寧に見ていきましようか。「春」の「あけぼの」のどういう点がすばらしいと言っているのでしょうか。また、そこにはどういう要素が働いていますか。要素というのは分かりにくいかもしれませんが、分からないようであれば、後で私の方から説明することにしましょう。

P

T ヒントを出すことにしましょう。「やうやう」と色に注目すると、どうですか。

P 時間が経つにつれて変化していく美しさです。

T そうですね。少し難しい言葉になるかもしれませんが、黒板には字数が制限されますので、「刻々と変容する美の姿」としておきましようか。ここまで来るとどういう要素があるか分かりますね。

P 時間と色彩です。

T そうですね。時間と色彩ですね。美しさを構成する要素として、この二つが働いています。しっかり心に刻んでおいてください。

では最後になりますが、この第二文の表現の巧みさはどういう点にありますか。二つの点で指摘できます

が、どうでしょうか。

P

T 「表現の巧みさ」というのは、何に注目したら分かるのか、また、それがなぜ大切なのか難しいですね。第二文を見てほしいのですが、「刻々と移り変わっていくあけぼのの美しさ」を見入っている作者の姿は、どこから分かりますか。文末に注目してほしいのですが。

P 連体形止めになっています。

T そうですね。連体形止めになっています。しかし、連体形止めになっていたら全て情景を見入っている作者の姿が出ているかと言うとそうではありません。ただ、連体形で止めたというのは、その状態が持続しているということが分かる訳です。「余韻」と言います。表現の効果というのは、全てを言い切らなくて残すことによって、却って表現の奥行きが増すことがある。そこに表現の効果がねらわれていると言える訳です。

では、改めて聞きますが、本文の場合の連体形止めの効果はどのようなものと言えますか。

P 最後まで言い切らず、言い残したことによって、連続していく時間が想像できます。だから、第二文以下には表現されていませんが、刻々と移り行く情景に見

入っている作者の姿が想像できます。

T そうですね。それに加えてその情景に見入っている作者の姿も想像できますね。そして、こういうことにも気付いてほしいのですが、「刻々に移り変わっていく美の世界」を、これだけの言葉数で表現できる。それが作者の「表現力」と言ってもいいと思います。我々も的確に表現する力を身に付ける必要があります。

そしてまた、時間をかけて四季の美しさを味わうということも、忙しい現代に生きる我々は考えた方がいいかもしれません。

では、ここまでの学びを頭に置いて、もう一度本文を読んでみましょう。その際情景が目には浮かぶように読むことが大切です。

P (黙読する)。

〔板書〕

・表現効果

目を引くような特異な表現

第二文を読まない、第一文の意味内容が分からない。

・特異な表現

四季を「時」に注目して、その良さをとらえる。「あけぼの」||「春は」の主部にすぐには結びつかない述部。

・主題の提示

春 は あけぼの。

(結論)

(説明・理由)

やうやう白くなりゆく山ぎはすこし明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

〔刻々と変容していく美の姿〕——時と色彩(要素)

・表現効果

連体形止め||刻々と変容していく情景に見入る作者。

言葉数||過不足無く的確に表現する作者の表現力。

T では、次に夏の部以下の文章を読みましょう。夏の部以下順番に取り上げていきますが、夏の部では第二文以下は夏の夜の何について書いてあるかを考えてみてください。

では、読んでください。

P (通読する)

T 夏の部においても、第一文と第二文以下の関係は、春の部と同じですから板書しておきます。(板書する)では、先程も言いましたように「夏の夜の何について書いてあるか」という点に移りましょう。この部

分はこう言い換えてもいいかもしれません。「夏の夜の
どのような情景が書かれているか、また、その情景同
士はどのような関係になっているか。」どうでしょう
か。時間がかかるかも知れませんが考えてみてください
い。

P
――

T そろそろいいですか。いくつの情景が書かれていま
したか。

P 四つです。

P 三つです。

T そうですね。いろいろ読めるところですね。三つと
四つの区別は、「闇もなほ」で切るか、「闇もなほ、螢
の多く飛びちがひたる」以下の情景を結び付けて読む
かによって違ってきます。螢が、月夜でも闇夜でも飛
んでいると読むか、闇夜だけの景色と読むかは読者に
任されているようです。皆さんはどちらでしょうか。

ここでちよつと知的なゲームを楽しんでみましょう。
仮に螢は闇夜だけの情景だと限定したらどうでしょう。
「闇もなほ。」(句点)ではなく、「」(読点)とし
て次の螢の項も続けて読むのです。そうすると「月の
ころ」が独立するのですね。「月のころ」が独立して

よいという理由は、どういう点にあると考えられます
か。

P 「月がきれい」だからかな？

T 皆さん、どうですか。近くの人と相談してもいいで
すよ。

P (意見交換する)

T どうですか。意見がまとまりましたか。

P 「さらなり」とあるからです。

T もつと説明を加えてもらえませんか。

P 「さらなり(言うまでもない)」と言うのだから、
何の説明もいらぬ。読者の皆さんも分かっているで
しょうというのではないですか。

T 皆さん、どうでしょう。

P (うなづく)

T そうですね。すばらしい気付きです。そう読めま
すね。では、ここまでのことを板書しておきましょう。

〔板書〕

夏は夜。

天象・情景

(結論)

←

(説明・理由)………夜の何が書かれているか、どうい

う情景が書かれているか

月のころはさらなり。

なぜ——夏の夜の月（のすばらしさ）は評価が定まっている。

闇もなほ、

（闇夜に）螢の多く飛びちがひたる

また一つ二つなどほのかにうち光りて行くも、
をかし。

雨など降るもをかし。

T では、ここからが大切なところです。「月夜、闇夜、雨の夜」が書かれているのですが、なぜこの三つが書かれたのでしょうか。三つのことを書いた作者の計算はどのあたりにあると考えられますか。

P —

T 難しいですね。では、「月」と「闇」はどういう関係にありますか。

P 逆というか、反対の関係です。

T そうですね。「月夜の明るさ」とは逆の関係、「月のころ」を反転させて「闇」を出した訳ですね。じゃあ、それに「雨」を加えたらどうなりますか。「夏は夜」

と言いつつ表現を重ねて読むとどうなりますか。

P —

P 分かった。夏の夜の全てだ。どんな天候でも、「夏の夜がいい」と言っているのではないですか。

T 皆さん、どうですか。

P なるほど。

T そうですね。「夏」は、天象、情景すべてにわたって「夜」がいいと言っています。もっと自由に読んでいいということになれば、夏の夜の涼しさを加えてもいいかもしれません。

ここで、もう一つ気付いてほしいことがあります。夏の部の文章のすばらしさは何に起因していますか。ここで使用されている表現技法に目を向けてほしいのですが、何が使われていますか。そして、その効果はどうでしょう。

P 対句です。

T そうですね。どこにどういう風に使われていますか。

P 「月と闇」「多く」と「一つ二つ」です。

T そうですね。しかし、もう無いのですかね。

P —

T ちょっと気付きにくいかもしれませんが。よく見てください。夜のすべてということになっていましたよね。

P 「月と闇」に対して「雨」だ。

T そうですよ。それで全てを網羅するという訳です。では、どういう効果をねらったの事となりますか。

P 印象深くするため。

T それはそうなのですが、そう簡単に言わずに詳しく説明するとうなりますか。表現する場合、作者はと言うより人間は単に技法があるから何気なく使うという事はないんですね。必ずその効果を考えている訳です。ここでは、どういう効果があると読めますか。

P

T 難しいですね。では、私の方から説明しましょう。

私はこう考えましたが、皆さんはどうでしょう。こういうことは言えません。「月」と「闇」のように、言葉を反転させたり、また『多く』と『一つ二つ』や『月』と『闇』などのように極端と極端を並べたりして、それらの中間に存在するものを全てイメージさせてしまう。そうすれば、夏の夜の全てが表現できる。」
そういうことは言えませんか。

P (考え込む)

T すぐには結論が出ないかもしれませんが、各自自分の判断ができるように後でもいいですから、考えてみてください。板書しておきましょう。

〔板書〕

夏は夜。——〔夜の全てが良い〕——天象・情景

← (結論)

(説明・理由)

夜の何が書かれているか、どう
いう情景が書かれているか

月のころはさらなり。

なぜ——夏の夜の月(のすばらしさ)

は評価が定まっている。

対句 (反転)

闇もなほ、

(闇夜に) 螢の多く飛びちがひたる

← 対句

また一つ二つなどほのかにうち光りて行く
も、をかし。

雨など降るもをかし。

〔第2時〕

T 今日、「春はあけぼの」の秋と冬の部を読みます。

目標は、前時に確認したように、作者の四季に対するものの見方と表現の特色をさぐります。それに加えて今日は、我々の四季に対するものの見方や感覚も検討していきましょう。

秋と冬の部を考えるのですが、作品として完結していますから、読みは冒頭から読みましょうか。

P 通読する。

T 先程、「表現の特色をさぐります」と言いましたが、秋の部では二つの事を対比的に述べようとしています。それは何と何でしょうか。それに注目して、まずは秋の部の構成をとらえてみましょう。

P 「夕日のさして」と「日入りはてて」です。

T そうですね。まずはそこに目が行きますね。板書しておきましょう。（板書する）でも、それだけではなさそうですね。他に何かありますか。

P 「鳥」と「雁」です。

T そうですね。それらの関係が分かるように板書しておきましょうか。

〔板書〕

秋は夕暮れ

←

夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どこ

ろへ行くとして三つ四つ、二つ三つさへ飛び急

ぐさへあはれなり。

まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。

日入りはてて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

T 秋の部の構成が理解できたところで、次に行きましょう。秋の部では、夕暮れの何がすばらしいと言っているのですか。「日入りはてて」の部分では、要素として「音」が挙げられると思いますが、「夕暮れ」の部分では何ですか。

P 景色です。

T そうですね。景色と言ってもいいですし、情景と言ってもいいですね。では、その景色（情景）がどのようなすばらしいと言っているのですか。「日入りはてて」の部分も合わせて考えてみてください。それぞれの景色をイメージして読むことが大切です。

P

T 秋の夕暮れの景色（情景）では、二つの景色を述べていますが、それらがいかにすばらしいかということ、作者は工夫を凝らして書いています。該当する箇所は傍線を引いてみてください。

P （作業する）

T 分かったところから発表してください。

P 鳥の景色のところで、「さへ、あはれなり」と書いてあります。

T （板書の「さへ、あはれなり」に傍線を引く）

T そうですね。そのように書いた作者の気持ちや意図はどうですか。

P あまり人に好かれない、また綺麗でない鳥までもが趣深いと言っているのだと思います。

T そうですね。鳥が美の対象として書かれたことはないでしょうね。それさえも秋の夕暮れは、趣深い景色として包み込んでいます。「さへ、あはれなり」と書いた作者の意図はありそうですね。他にないですか。

P 「まいて」と書いてあります。（板書の「まいて」に傍線を引く）

T その効果について説明してください。

P 「ましてや」と言うんだから、雁の飛ぶ姿はすばらしいのではないですか。

T そうですね。「鳥」と比較して「雁の飛ぶ姿」が強調されています。いい指摘です。しかし、注意してほしいことがあります。単に言葉を指摘するだけでは、作者の意図が汲み取れたという訳にはいきません。読者の我々が作者の意図や工夫にできるだけ近づかなければいけません。今、指摘した言葉も含めて、作者の工夫の意図を考えてみてください。要は、「秋の夕暮れ」のすばらしさに読者が気づいてくれればいいのです。難しいかも知れませんが、頑張って読んでみてください。

P

T では、私の方から説明しましょうか。言葉をこういう風につないで読むとどうでしょうか。鳥のところで「さへ、あはれなり」、雁のところで「まいて……いと、をかし」、風の音、虫の音のところでは「はた、言ふべきにあらず」とあります。この評語の関係はどうなっていますか。

P だんだん程度が高くなっています。

T そうですね。だんだん強めた表現になっています。三つの景色を並べるとよく分かりますよ。「鳥の寝どころへ行く」と三つ四つ、二つ三つ飛び急ぐ「姿」、「雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる」姿、

「風の音、虫の音」、これらを秋の風情として並べるとどうなりますか。

P 雁や風の音、虫の音などに風情があるということ、皆が知っているんだ。

T そういうことですよね。しかし、もう少し丁寧に読むと面白いですよ。「まいて」に注目してみましようか。本文のとおり読む場合と雁の風情は皆知っているんですから、それだけを取り出して言う場合。つまり、「秋は夕暮れ。山の端いと近うなりたるに、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。」だけを言う場合。どういう違いがありますか。

P 後者は平凡になってしまふ。

T そうですよ。表現って面白いですよ。美の対極にある「鳥」と「雁」を並べる方が、互いに引き立ちますね。「まいて」の効果です。しかし、まだ、あるのです。鳥は人家に近く飛びますから近景として描かれる。しかし、雁は中空高く飛びますから、遠景として描かれている。ここにも対比がある。全部を包み込んで「秋の夕暮れ」と言う訳です。また、こういうことも言えます。「鳥の寝どころへ行く」姿だけで「雁」の姿の無い景色を想像してもいいですし、鳥の姿を目で追っていて、雁の姿を遠くに認めたというの

もいいでしょう。自由に読んでいいところです。

また、「三つ四つ、二つ三つ」に先程傍線を付けた人がいましたが、そこも表現が冗漫にならないようにという工夫ですね。いい指摘でした。

次に、ちょっと考えてください。「秋は夕暮れ」と言いながら、なぜ「日入りはてて」という記事が並ぶのですか。両者はどういうつながりですか。どういう点でつながっているのですか。それも考えみてください。

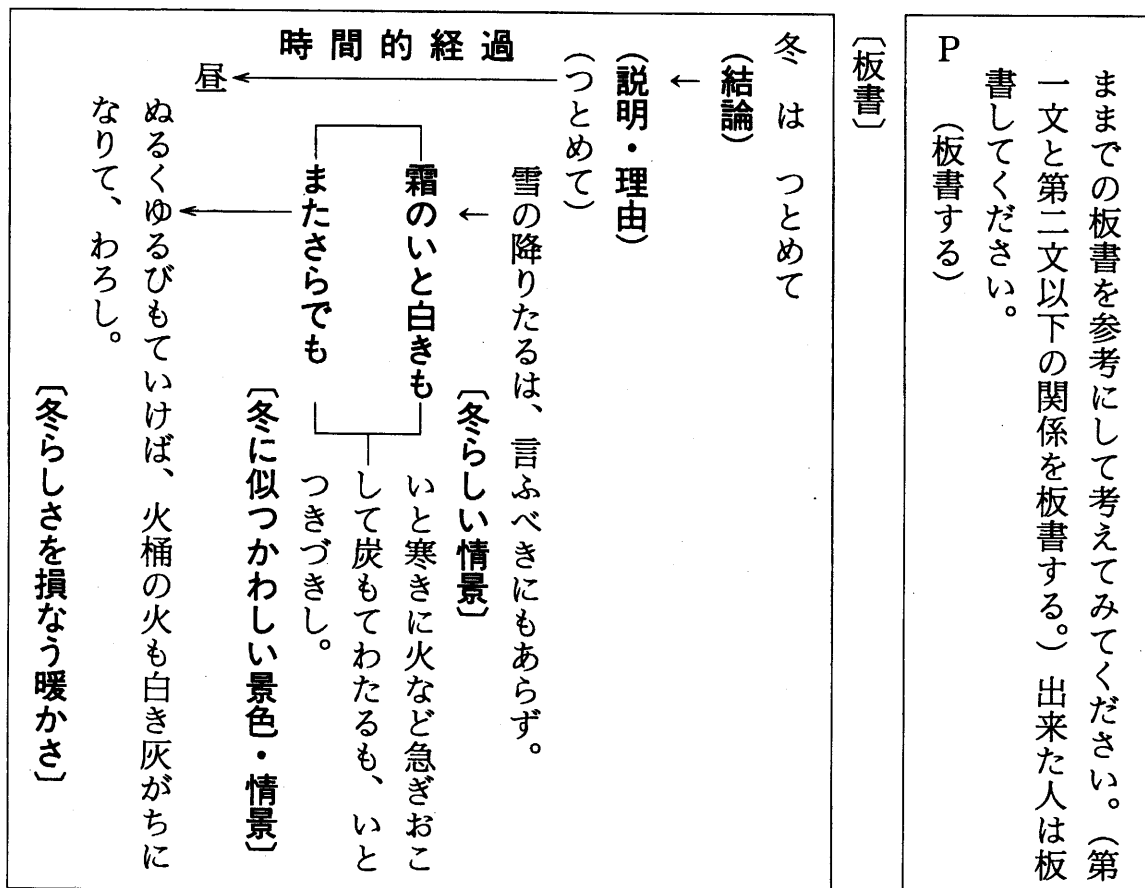
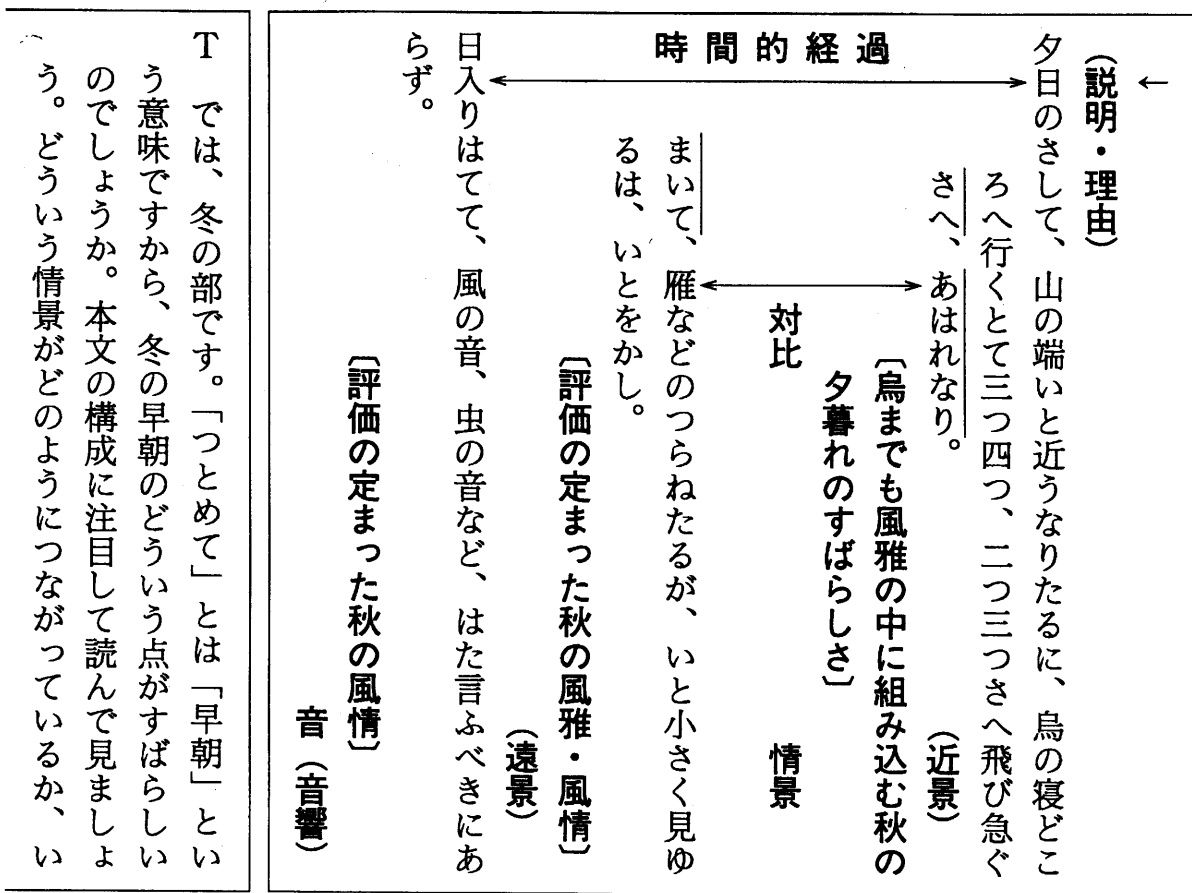
P 「夕日のさして」と「日入りはてて」は時間でつながっていて、「鳥、雁」と「風、虫」とは、秋の風情でつながっています。

T そうですね。そうなっています。「はた、言ふべきにあらず」というのは、「また、言うまでもない」という意味ですから、「皆さんが知ってのとおりです」という訳です。景色景色できた表現をここでは、ちよつと逸脱した訳ですね。でも、自然に読ませてしまう作者の表現力に注目しなければなりません。ここまでのことを板書しておきましょう。

〔板書〕

秋は 夕暮れ

(結論)



T よくできました。こういう風になっていますよね。

「つとめて」と「昼」の関係だけを押さえておきましょうか。どうなっていますか。

P 朝の部分は情景が書かれていますが、昼の部分とは「冬らしいか、冬に似つかかわしくないか」でつながっています。

T 「いと寒きに火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし」の部分をイメージして説明してくださいませんか。

P 朝起きたのはいいが、あまりの寒さに体が動かない。「早く早く（炭が来ないかな）」と震えながら待っている。炭を配る人も、それが分かるから息を弾ませて配ってまわる。そういう姿が想像できます。

T それが冬に似つかかわしいという訳ですよ。冬の朝は寒いですからね。冬の「つとめて」のどういう情景がいいのか、板書でよくまとめられていると思いますので、板書を見ながら説明してくださいませんか。

P 雪の降った朝は、一面の雪景色で、その美しさ（すばらしさ）は今更説明するまでもない。それが一項目です。そして、白の連想で一面に白く「霜」の降りた朝に移って、またそれが次の霜の降りていない朝と逆転の発想で対になって、非常に寒い朝炭を急いでおこ

して各部屋に配り歩く。それが冬の朝らしくてよいと言っているのだと思います。

朝と昼の関係は、情景から感覚に変化して、気温も高くなつていくと、火桶の火も白く灰がちになって、同じ白でも火桶の白い灰は雪の白さとは違ってしまりがなく、冬らしくないので良くない。こんなところでしょうか。

T よく分かる説明でした。すばらしいですね。私が言いたかったことまで言ってくれました。

では、本文の読解の最後に、まとめをしておきましょうか。春の部からの板書を見てください。

作者の独自の感覚がどういう点に伺えるかと言えば、四季を時という観点でとらえている。言われてみるとなるほどとは思うものの、こういうとらえ方を我々にはなかなかできない。四季をとらえるのに、こういうとらえ方があるのかという勉強をしておきましょう。ところで、先に断っておきますが、四季のとらえ方に関しては、後で別な資料を加えて勉強しようと思います。

表現面に注目すると、「春はあけぼの」と明確に言い切つて印象を強くする。第一文だけではその理由が分からないので、読者は第二文以下を読まざるをえな

い。そういう工夫をしている。そして、第二文以下は、四季それぞれに工夫を凝らした表現で、色彩に関する語を配置したり、対句を用いたり発想を逆転させたり、連想で項目を並べたりしている。非常に細かく配慮していることが分かりますね。そして、短い表現ながら内容的には非常に豊かな情景が描かれている。

こういう表現の仕方は、非常に我々の参考になりますね。学びたいところです。

*

では、先に行きましようか。先に断った四季のとりえ方に関してです。作者のとりえ方は今勉強したところですが、我々は何によって四季をとらえているかと言えどもなりますか。基準とかものの見方とか何でもいいですが、どういう時に四季を強く感じますか。

P 入学式。

P プール。

P 夏休み。

P コートを着るようになった時。

T いろいろ出ますが、思いつくことを全てノートに書いてみてください。

P (作業する)

T そろそろいいですか。我々は何によって四季を感じ

ていますか。書いたことをまとめてと言いますか、分類して言ってみてくれませんか。

P なにか行事がある時。

P 暑さや寒さから解放された時。

P 好きな季節が来た時。

T そうですよ。どうも我々は何か行事があった時とか、自分にとって快不快か、または天気予報とか気温とか、桜前線とかの報道とかでも季節を感じ取っているですよ。作者と比較して何が違うかと言え、いろいろ指摘できるでしょうが、一つに作者のように四季を通してある観点でその特色をとらえようとはしていない。いや、したことがないと言えるのではないでしょう。

もう一歩突っ込んで考えてみましょうか。なぜ、作者のようにとらえないのでしょうか。これもまた、様々な考えられるでしょうが、一つにそういうことをする必要がない。生活する上に必要がないということも言えるでしょう。そして、ほとんどの場合は、自分にとって気持ちがいいかどうか、感動できるかどうかでとらえている。いつも出来事的だし、いつも断片的なので、それがいいとか悪いとかではなくて、そういうとらえ方をしている。

ところが、作者は四季を通じて「時」という観点を導入してきた。これは、我々には大きな驚きだったし、大きな発見にもなった。この教材を学ぶ意義の一つがここにあるという点はおさえておきたいですね。

そして次に、表現面に注目すると、あれだけの言葉数であれほど豊かなイメージや世界を現成する。この表現力は我々が受け継ぎたいと思うところです。昔から有名な作品の冒頭など暗記させられましたが——私も中学生や高校生の時いろいろ暗記させられました——、そこにはどういう意味があったかと言えば、自分だけではあんなに優れた表現はできない。有名な作品の表現は、そのリズム、表現の的確性、また表現の完成度において非常に優れている。それを取り入れて、我々も優れた表現者になろうという意図があったのではないかと思います。ですから、どこでもいいですが、自分が感動できる表現、「うまい」と思わずつぶやくような表現を暗記するというのもいいかもしれません。また、全文を暗記するのもいいかもしれません。頑張って暗記してみてください。

先程も「ものの見方」について勉強しましょうと言いましたが、これも勉強になると思います。今からプリントを配りますから、読んでください。どういう点

が自分と異なるか、チェックしてみてください。
(プリントを配付する)

* 配付したプリントは、「文教国文学」第四十一号に紹介したが、授業の流れを生かすためにここにも再録したい。ご了解を願う。

季節のなかに生きること

最近、世界中が異常気象だ。日本も去年は冷夏で、米も不作だった。この夏は観測史上の記録的暑さだった。アメリカも、ヨーロッパも酷暑だった。どうも環境破壊と無関係とは思えない。四季のめぐりが時どきおかしくなるのも、オゾン層の破壊などの影響をうけるのだろう。

季節が季節らしさを失って、異常気象になると、つくづく季節がごく自然にめぐっていたノーマルな時代がなつかしくなる。もともと日本は実に微妙な四季の変化に恵まれた国だった。一度、熱帯の国々を旅してみると、四季があることの有難さが身に染みる。

旅をしないまでも、昨年のように冷夏になって、びしょびしょ長雨に祟られたりすると、はじめて青空に輝く烈日が懐かしくなる。ごくノーマルな夏なら、夏は暑いに

越したことはない。夏が暑いからこそ、かき氷のうまさも、すだれを吹く風の涼しさも、人生の極楽と感じられる。現代人はこの楽しさを棄てて、冷房のなかの暮らしを快適とするが、あの単一無機質な涼しさは、不自然で身体によくないだけではなく、この生きる豊かな楽しさを完全に忘れさせている。

年末に久々に『枕草子』を読み返したが、そこに書かれているのは、四季折々の生きる歓喜といったものだ。私は中学の頃からよく読まれたが、清少納言が、生の歓喜に、これほど陶然と酔いしれている人であるとは、ついぞ考えてことはなかった。ある意味で『枕草子』は地上に生きる幸福を微細に数えあげ、それをわれわれに教える「幸福の教典」といつてもいいものだ。

有名な冒頭の「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」という一節は、もうすでに、花の香りのする春の夜明けの、次第に明るくなる情景が、それだけで、何か物狂おしい嬉しさを呼び起す、ということをいっているのである。

もちろん、清少納言は梅も好きだったろうし、春霞に心をひかれただろう。だが胸を喜びで強くしめつけるのは、まず春の典雅な夜明けの、とくに山際の白くなって

ゆく空に紫の雲のかかる姿なのだ。

彼女の心をときめかせる夏の風物は「夜」「月の頃」である。闇のなかを飛ぶ蛍の華麗なはかなさは、どんなに彼女の胸に染みたであろうか。また秋の夕暮れの空を仰いで、鴉が水平に飛んでゆくのを「みつよつ、ふたつみつなど」とびいそぐさへあはれなり」と見つめている心には、まるでマーラーの第三番の哀傷深い終楽章が消えてゆくような感じさえする。

清少納言は古来理知的な才女という評判をえている。『枕草子』もするどい批判の針を含んだ人生の書だとするのが普通だ。しかし四季の折々に自然と人事がもたらしてくれる生の楽しさを、おいしい飲みもののように味わっている彼女が見えるようになると、清少納言が知性の人であるよりは、微妙な感じ方を楽しむ感性の人であることが分ってくる。一見自分の好き嫌いで「をかし」「わろし」と書いているが、それは価値評価ではなく、喜びがどんなものに最も強烈に感じられるか、の告白と見られるべきものだろう。

日常の暮らしのなかにも、彼女は実に細かく喜びを感じている。たとえば「市」づくし、「峰」づくし、「家」づくしなどは好きな市、気に入った峰、家のレパートリーだし、「降るものは、雪。霰。霰はにくけれど、白き雪

の混じりて降る、をかし」などを見れば、清少納言が少女のように胸をはずませて雪に見入る姿が目には浮ぶ。

『枕草子』を読み終えて思ったのは、季節の移り変わりを、あたかもスクリーンに映る美しい映像のように眺めた日本人の心の豊かさであった。まずそこには、虚栄心がない。野心もなく、競争心もない。ただ春夏秋冬に訪れる季節の気配をへこよない良い贈物として受けとる心があるだけだ。

思えば、われわれ自身も〈季節〉のなかにいる、と自覚することで、どんなに日々の無感動な惰性的生活から救われていることだろう。いま冬だと思うだけで、もう日常のルーティーンの外に出ることができるのである。

辻邦生「生きて愛するために」

(株式会社メタログ、一九九四) より

T 皆さんどうですか。先程我々が検討したような読みではなくて、清少納言が生の歓喜をうたい上げているという読みには驚きませんか。こういう読みも我々の「ものの見方」を刺激してくれます。

この文章を読んで学んでほしいことは、四季はどのような人にも訪れる。清少納言にも辻邦生にも、そして我々にも。それをどのように迎えるかは、その人独自の

感性や感覚、またものの見方によるでしょう。しかし、辻邦生の文章からは自分の生活と季節の関係、清少納言の四季に対するものの見方と自分のものの見方との関係、またそれをどのように表現していくかなど、我々が彼の文章を我々の内側、心に取り入れて、我々自身がどう変わっていきけるかを考える。と言うよりもどのような作品であれ、一つの作品を読むということは必然的に我々に変化を強いるといった方がいいのですが、その影響を検討するのもいい。そう思っで紹介しました。後でまたゆっくり読んでみてください。

では、終わることにしましょう。

* 辻邦生の作品の扱いについては、様々な扱いが考えられる。最も大事なことは、学習者が辻邦生の文章をどのように受けとるか、どのように刺激されるか、それが問題になる。実際の学習者の反応を見て、指導計画を考えることが必要になるであろう。実際の教育現場で試して頂きたいところである。

* この試案では、口語訳などの基礎的な作業は載せていない。実際の教室では、口語訳や清少納言に関すること、作品の特色などが扱われるであろう。基礎作業が終了した後の授業展開の一助になればと思う。口語訳に代わる

ものとして、私自身は傍注資料の活用などが有効である
と思っている。

* 国語科教育の目標を「認識主体の育成」に設定して、
授業展開を考えてみた。課題や話題の前には、少なくとも
も作者、教師、学習者は対等であるべきである。本教材
の場合は、「四季を迎える人間の気持ち」が課題となる。